

「(プログラム名称を記入) 参加報告書」

京都大学学部文学部・3年 益田天朗

1、学習成果

日本人として育てられ、日本人に囲まれて暮らしてきた自分が海外へ出て、異なったバックグラウンドを持った人々と交渉をもち、何らかの目標を達成するということはこれからのグローバル社会において必須の活動であることに疑いの余地はない。今回の留学を通して得られた最大の収穫は国際理解、国際協力の難しさを実体験として学んだことである。

ハサヌディン大学の日本語教育の支援を行った際には現地の大学生や先生の考え方やふるまい方に強い違和感を覚えることも多々あった。JICA のボランティアの方や30年近く前からインドネシアに進出している企業の方々から何う、現地での苦労、問題を乗り越えていく過程、将来への展望といったお話をより深く理解できたのは自分自身が現地の人々と関わりあう経験をもてたことによるものだろう。そのようにして得られた教訓をもとにして、自分の活動を改善していくということもできたと思っている。

2、3、海外での経験、プログラム内容

2014年7月までの活動は中間報告に記した通りである。9月以降は東インドネシア、スラウェシ島のハサヌディン大学で日本語教育の支援活動をさせていただいた。活動は週に3日ほどで、活動内容は「日本事情」という日本の文化や社会などについて勉強する日本語学科の2年生向けの授業の補助、先生向けの読書会(写真を右に掲載した)などであった。それ以外の時間は地域研究をされているハサヌディン大学の先生の調査に同行させていただいて、農村を訪問したり、現地に進出している日系企業の方のお話を伺うなどして過ごした。



4、進路への影響

今回のインドネシア滞在を通して、日本とインドネシアの間にどれほど強いつながりがあるのかということがはっきりと理解され、自分もぜひこの二国間のつながりの中で、またアジアという枠の中で仕事をしていきたいと思うようになった。これには、やすやすと国境を越えて生活の糧を稼ぎ出していく中国系インドネシア人の暮らしを垣間見たことの影響があるだろう。日本に閉じこもっていたのでは彼らと出会い、その生活を間近で眺められるような機会を得ることはできなかったはずである。そのほかにも、このような貴重な機会をたくさんものにすることができ、自分の将来を考えるうえで実に一年に有意義になったことを確信している。